



和顔愛語

寺報

令和6年9月号

おかげさまをエネルギーに見守られて生きている

ハリ五輪が閉幕しました。日本の選手は金メダル20個を含む計45個のメダルを獲得し、海外で開催された五輪としてはこれまでで最も多い金メダルの獲得となったそうです。努力が報われた選手達の姿は、見ているこちらの胸に響くものがありました。一方、誤審と疑われる判定などもあり、悔しい思いをした選手もいたようです。どんなに頑張っても人間の行うことには誤りがつきものですが、人生をかけている選手とともに審判もまた、判定の技術を磨いていってほしいものです。

勝負事の世界では勝者の陰に、必ず敗者が生まれます。今大会、特に印象深い敗者の姿は柔道の阿部詩選手でした。連覇を期待された阿部選手は、残念ながら2回戦で敗れてしまい、ご覧になった方も多いと思いますが、試合終了後、阿部選手は涙を流しながら崩れ落ち、悔しさを顕わにしていました。「この選手が背負ってきたものはどれほどの大ききなものか」と感じられた方も多いでしょう。人は目

に見えないものを自分の力に変えたり、その逆に重圧と感じたりします。阿部選手は間違いなくそういった大きなものを抱えていたに違いありません。

もちろん、そのようなものを自身の力に変えて金メダルを獲得した選手も大勢いました。そんな選手の多くが「いろいろな人の支えでここまでくることができました」と言っていた気がします。おかげさまを力にして生きていくことで、素晴らしい結果がもたらされることを彼らは証明しています。五輪を通じて、そのことを実感することができました。

大ききさの違いがあるとはいえ、私達も見えない何かを背負って生きています。そのなかには亡くなった方、ご先祖様から受け取ったものもあるはず。見えない誰かに護られながら、自分が抱えている見えないものを、よりよく生きる力に変えて生きていく。秋の彼岸を迎えるにあたり、へおかげさまをエネルギーに変えて日々を過ごしていきたいものです。

生活の中にある

仏教の言葉

④

私たちが日常で使う言葉には、仏教に由来する言葉が多くあります。なかには、仏教ではまったく意味が異なるものも。この「コーナー」では、そんな言葉を紹介していきます。

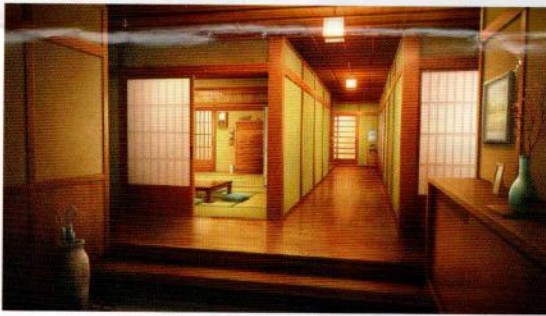
玄関

私達は他の人の家を訪れたとき、特別な理由がない限りは、玄関を通って入ります。そのときに、どんなクツがあるのか、どんな物が置いてあるかなど、玄関の様子を見ると、家族構成や趣味など、その家のことが見えてくることもあります。

この「玄関」は、仏教に由来する言葉とされます。仏教において玄関は、「玄妙（奥深くて優れている）なる教えの関所」、つまりは、「仏教の入口」の意味で

使われる言葉です。

特に禅宗では、式台と呼ばれる寺院の正面入口が、禅を学ぶための第一歩となる場であることからこの式台を玄関と言いました。ここから現代使われる



「建物の入口」の意味が生じたとされています。

その禅宗の寺院の玄関によく「脚下照顧」という張り紙が貼られていることがあります。本来は、自分自身をきちんと顧みて見つめよという意味ですが、そこから、足もとを見て履物をそろえよ、との意図で掲示されています。

寺院に限らず、玄関は建物に入る第一歩となる場所です。通る側はそのような想いを持って、無作法にならないよう気を付けたいですね。

果報

「果報は寝て待て」。よい結果を追い求めても限界があるから、自分のできる事をやるだけやったら、あとはあせらず時機が来るのを待てばよい、という意味のことわざです。たしかに幸せの訪れは人の力ではどうしよう

もないところがありますから、じっと機会を待つことも大事でしょう。

この「果報」、現代では「幸運」や「めぐりあわせのよいこと」を指して使われる言葉ですが、仏教語としてはそのような意味はなく、「過去のおこないの結果として受ける報い」のことをいいます。

「自分自身の行い」を重要視する仏教では、善いおこないをすれば善い報い（善因楽果）、悪いおこないをすれば悪い報い（悪因苦果）があるという考えがあり、この言葉はそれを表したものの。このうち、前者の「善い報い」という部分のみが注目され、現代の意味になったといわれています。

仏教の考え方からすれば、良い結果というのは、ただ「寝て待っている」だけではやってきません。いつの日かやってくる良いめぐり合わせに備え、日々努力を積み重ねていくことが大事といえます。

伝えたい言葉 (16)

このごろ生死を離れんと欲わん人は、証し難き聖道を捨てて、往き易き浄土を欣うべきなり

(法然上人御法語)

〈書き下し〉

この頃の世の中で生死を繰り返すといわれる生死輪廻から離れたいと願う人は、自身でさとりを証明することが難しい聖道の教えを捨てて、行くことが容易な極楽浄土への往生を求めべきです。

〈現代語訳〉

仏教の目的は、苦しみの多い輪廻を離れ、さとりを開くことです。輪廻とは生まれては死ぬことを繰り返すことなので「生死」と呼ばれます。人はこの世

に生まれ、必ず死を迎えます。生きていく間にたくさんのもを得ても、それをあの世に持つていくことはできません。〈人〉に生まれれば幸せな生活を送ることができるかもしれませんが、死後生まれ変わる先には①神様の世界、②人の世界、③修羅の世界、④畜生の世界、⑤餓鬼の世界、⑥地獄の世界という六つの世界があり、神様や人に生まれ変わるのとはとても珍しいことで、多くの場合は③から⑥の世界を巡ることになります。動物に生まれ変わり誰かに食べられたり、また餓鬼に生まれ変わり空腹に苦しんだり、地獄に墮ちて絶え間ない苦痛を味わうこともあるのが輪廻という世界です。その反対がさとりの世界。そこは輪廻を離れた穏やかな状態であり、あらゆる苦しみが消滅した涅槃寂静の境地を味わうことができます。このような素晴らしい境地に至るためには、

一生懸命修行に励まないとなりません。その修行を完成させるためには、家族や仕事を捨てた出家が必要となり、さらに戒律をしつかりと守り、その上で瞑想修行を行う必要があります。浄土宗の御本尊である阿彌陀様は、師匠である仏様の指導のもと、量り知れない期間の修行に励んで仏になったといえます。阿彌陀様でもさとりを開くためには師匠となる仏が必要で、その上で、長期間の修行をして仏となり、輪廻の世界を離れることができました。このように自



分で修行に励みさとりを開く教えを「聖道門」といいます。私達が生きるこの時代には仏様がおらず、指導を直接受けることができません。ですから現代にさとりを開くことは極めて難しいということです。法然上人は庶民もさとりを得るためには、仏様のいないこの世でさとりを目指すのではなく、阿彌陀様がいる極楽浄土に往生し、輪廻の苦しみから離れる「浄土門」がいいのではないかと考えました。その極楽浄土へは「南無阿彌陀仏」とお念仏をとなえるだけでいいというのが法然上人の考えであり、だからこそ「往き易き浄土」なのです。上人は激動の人生を送りましたが、これを確信してからは命尽きるまで穏やかな心持ちで過ごすことができたようです。私達もそれを見習い、お念仏を頼りにして、忙しない日々を穏やかに過ごしてまいりましょう。

Q&Aですぐわかる! なるほど浄土宗

⑪

身近な仏教の疑問をQ & A
形式で説明します!

— お供物にはどのような意味があるのでしょうか? どんなものが多いでしょうか。

— お供物はお仏壇やお墓、あるいはお布施とともにお寺のご本尊様やお仏壇などにお供えするものです。仏様に食べ物をお供えすることは、古くから行われてきました。今でこそ「お布施」というと

金銭を意味しますが、お釈迦様がお布施としてもっともよく受け取ったものは食事です。お釈迦様は

食事のすべてを

お布施によって

賄っていました。

修行者は食事を

作る間がないほ



一般的には生菓子、水菓子(果物)や、故人の好物等を供える。

ど真摯に励みます。お供物をそなえることは布施の修行であり、また仏道に励む人をサポートする効果があります。故人の好きだったものをお供えすれば、きっとお浄土での修行の効率も上がることでしょう。

お供物としてあげる品物に決まりはありませんが、仏様は「五辛(蕪・玉葱・大蒜・らっきょう・生姜)」というニオイの強いものは召し上がらなかつたそうです。このため、ニオイの強いものは仏前に供えないのが一般的です。また日持ちしないものは気がつく

私たちの宗旨



名称：浄土宗

宗祖：法然上人(1133-1212)

開宗：承安5年(1175)

本尊：阿弥陀如来

教え：阿弥陀仏の平等のお慈悲を信じ「南無阿弥陀仏」とみ名を称えて、お浄土に生まれることを願う信仰です。

普照山 正定寺

■所在地

〒111-0036 東京都台東区松が谷2丁目1-2

■TEL: 03-3841-1853 ■FAX: 03-3841-1777

紫金山 静蓮寺

■所在地

〒110-0004 東京都台東区下谷1丁目12-21

■TEL: 03-3843-4034 ■FAX: 03-3843-3442

母沖山 清見寺

■所在地

〒100-2211 東京都小笠原村母島字元地122

住職あいさつ

今年の夏に発生致しました台風10号は、九州地方を中心に大きな被害をもたらしました。地震をはじめ、自然災害が起こる度に太刀打ち出来ない恐ろしさを感じます。

今年で関東大震災が発生して101年。今では当時の面影は一切無く、見事に復興しております。いつ起こるか解らない災害の怖さがありますが、それでも日本人はどんな状況でも立ち上がり、復興を遂げて参りました。この世に生きる私達だけでなく、先立たれたご先祖様方達も、きっと力強く応援し、支えてくださったからこそ立ち直るのだと信じております。しっかりと備えはしつつも、いつも見守ってくださるご先祖様の事を思い、感謝をし、日々精進して参りたいものです。

